

GCOE 国際会議出席報告書 (外国旅費用)

拠点リーダー 川合 光 殿

(ふりがな) 氏 名	かshiyama かずみ	所属・職名	指導教員名 (院生の場合)
	榎山 和己	天体核・D3	中村 卓史
Tel,Fax e-mail	075-753-3880, kashiyama@tap.scphys.kyoto-u.ac.jp		
発表題名	Magnetar Astero-seimology with long-term gravitational waves		
著者名	Kazumi Kashiyama & Kunihiro Ioka		
会議名称 ・開催期間	Physics of Neutron Stars 2011 自 2011年7月10日 ~ 至 2011年7月15日		
開催地 (国、市)	ロシア、サンクトペテルブルグ		
出張期間	自 2011年7月9日 ~ 至 2011年7月16日		
国別参加者数	ロシア (約 50 名)、アメリカ (約 20 名)、日本 (3 人)、合計 (約 110 名)		
<p>発表内容、聴衆の反応、質疑応答、その他について簡潔に記述してください。 (口頭発表・ポスター発表の別も文中に明記すること。)</p> <p>私は今回、“Magnetar Astero-seimology with long-term gravitational waves” というタイトルでポスター発表を行った。この研究会では合計 4 時間程度のポスターセッションが設けられており、多くの参加者にポスターの内容を説明する時間が十分にあった。私の発表の趣旨は、強力な磁場を持つ中性子星 (マグネター) の内部磁場を、次世代重力波干渉計を用いて測定することができる、というものであった。質問として一番多かったのは、「次世代重力波干渉計は何年後に稼働するのだ？」というものだった。もう少し踏み込んで「重力波なんて遠い先の話だから今そんなことを議論しても意味はないのでは？」という意見もあった。次世代重力波干渉計は現在の計画では 5 年後、遅くとも 10 年以内には稼働するとされており、重力波を用いた天文学は我々のグループも含め、世界中で盛んに研究されている。もちろん、実験・観測計画は遅れるのが常ある、というのは理解しているが、業界ごとの認識の違いを今回の研究会で強く再認識した。一方で、私のポスターの内容に興味を持ってくれた参加者と、今回発表した研究の発展形についても言及した活発な議論を行うことができた。</p> <p>また、研究会には中性子星の研究において世界をリードする研究者が多数参加しており、レビュー講演等によって中性子星研究における未解決問題を整理することができた。特に A.Harding 氏の講演で、γ線衛星 Fermi によってミリ秒パルサーの多くで γ線放射が見つまっているという事実を知ることができたことは、非常に大きな収穫であった。これに触発され、私の過去に行った「パルサーからの TeV 電子陽電子放射の研究」に関して新たな進展があると考えている。</p> <p>以上のように、この研究会は私が今後研究を進めていく上で非常に意義深いものであった。</p>			

